

舞首

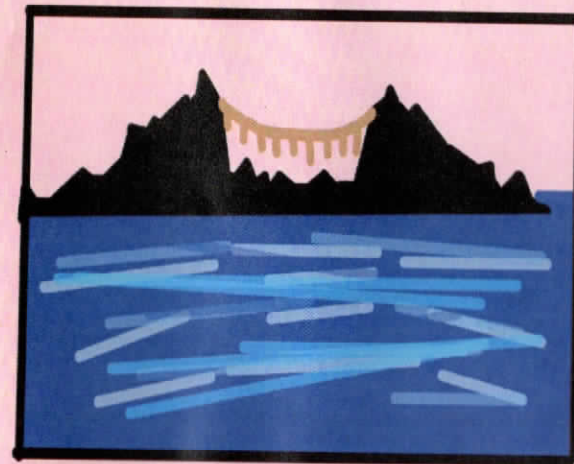


舞首



恐霊として神奈川県真鶴に伝わる江戸期の奇談集「絵本百物語」に記載
鎌倉期、寛元年間のこと、伊豆の真鶴の祭りの日の夜。三人の武士
(小三太、又重、悪五郎と伝わる)が酒に酔いに
啖い口論となって斬り合いの死闘に至る。諍いの
原因は伝わっていないが三人はいずれも死亡
死後諍い続け首だけが海で三つ巴の争いを続けた
と言う。
首達は夜には口から火を吐き、昼間は三つ巴模様
の波を立てることから
この海域を土地の人間は巴け淵と呼んで恐れた。
海面に三つ巴模様の波が現れる潮流の為、海の難
所であったと思われる海難場所の口伝として伝
わっているのかもしれない。

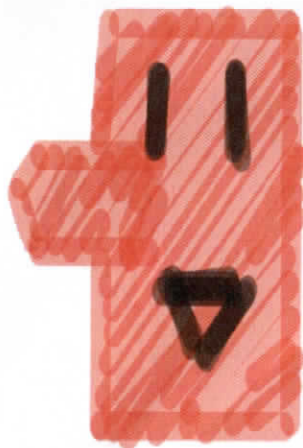
舞首がいる場所



三ツ石です



天狗



天狗

これは岩のお天王さんとも呼ばれている津島神社で、素佐之男命(案内看板のママ)であり、寛文4年(1664年)勧請されて以来、疫病と厄災難除けに霊験あらたかとして多くの信仰を集めたのだという。



この神社の珍しいところは、普通の神社では狛犬であるところが、その代わりに天狗が入り口の両脇に建てられているところである。
どちらも相当に古いもので、まさに「天狗の鼻はヘシ折られ」てしまっているのであるが、流れる頭髮、服のしわ、細かく表現された足の爪から歯の1本1本まで、その緻密な石細工には目を見張るものがある。おそらく、これは「阿吽」のうち「阿」に該当するものであるうか。

これはどの見事な石細工であるから、おそらくそのある石工の作りかたといひや、ちもなき無名の石工であるのか記録が全くないと言うのが驚きである。

その両天狗の鼻には、石明が一基だけ傾斜されており、説明版にもないもので、詳しいことはわからない。地域の方に詳しいお話をしようか。

「神様にも前なんてないよ!! 神様は神様でしょう」

「いつからあるって? 鼻から!! あたしが小さい頃は、よくあそこ下に 宝物隠してたから!! アハハ!!」

といった程度のお話しか聞くことができなかった。しかし、ふむ、実はこれが神様とは何なのか、という問いにもっとも正確に答えているものかもしれない。大きな神社や一之宮などの神様ならいざ知らず、御中の住宅にまされるように建ち、村人の生活に密着した神様というのは、案外それだけのいのかと思ってしまうのである。

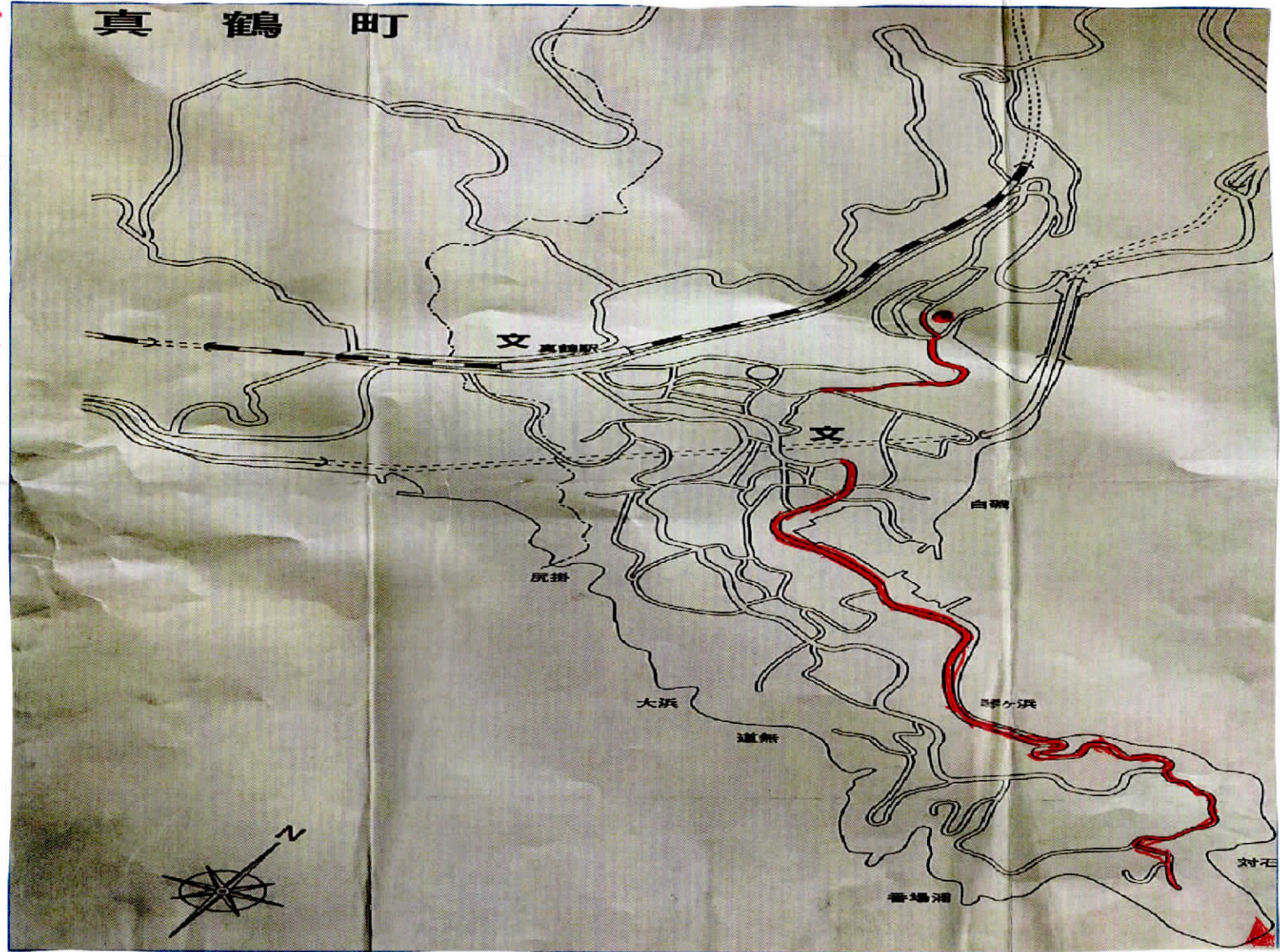


天狗がいる場所は



津島神社

▲ニまいくひ
 まなづるに
 まいくひとい
 ようかいが
 いることが
 分かりました。
ニッで
 ↑
 いる場所



●ニてんぐ
 てんぐが守て
 いる神社
 がありました。
津島神社です。
 ↑
 いる場所